昭和二十九年一月二十五日　初版印刷
昭和二十九年一月三十日　初版發行

昭和文學全集29
椎名麟三　野間宏　梅崎春生集

著作者　椎名麟三　野間宏　梅崎春生
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店（かどかはしよてん）
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
整版所　中光印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

椎名麟三
野間宏
梅崎春生集

昭和文學全集

角川書店版

目次

椎名麟三集		卷頭寫眞 椎名麟三
筆蹟		野間宏
永遠なる序章		梅崎春生
深尾正治の手記		
解説	赤岩榮	七
年譜		八二
野間宏集		
筆蹟		一二三
眞空地帶		一二五
解説	安部公房	一二九
年譜		三三三
梅崎春生集		三三四
筆蹟		
櫻島		三三九
日の果て		三五三
黑い花		三七九
空の下		四〇二
解説	淺見淵	四一〇
年譜		四二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

椎名麟三集

ぼくたちの自由は
推断に於てはじめて
証し得るものなのだ

椎名麟三

永遠なる序章

第一章

日はもうたそがれてゐる。風が強い。砂川安太は、後を振り返つて、今そこから出て來たばかりの病院を見ながら、思はず忌々しい聲で呟いた。——まるで大きな墓みたいだ。

その古びたコンクリートの建物は、樹木にかこまれて、全く墓のやうにひつそりしてゐる。夕闇にうかんでゐる玄關の車寄せまでが墓場のやうに白々しい。安太は、溜息をつくと、そこに見えるお茶の水の驛の方へのろのろ歩き出した。その彼の姿は、彼自身まで、墓場の番人であるかのやうに見榮えのしない恰好である。機械油のしみのある復員服、そして左足が少しをかしい。義足なのだ。それは歩くたびに、微かないやな音を立てる。肺の駄目なことは知つてゐた、と彼は心に呟く。しかし心臟までが駄目になつてゐようとは知らなかつた。今となつては、一切がもう無駄なのだ。歩くといふことさへ無駄なのだ。

安太は、やつと橋まで來ると、もう立つてゐることも出來ないやうに、欄干に凭れかかつてゐた。眼の前が暗く、このまま死んでしまひさうな氣がする。驛から吐き出された多くの人々が、夜にせき立てられてあわただしく彼の後を通る。しかし彼には、もう何を考へる力もない。安太は、溜息をつくと、もう一度橋の下を眺めた。山の上から谷底でも見るやうにその水は遠い。ふいに自分の傍で、何かの火の粉が、強い風に小さくとび散つた。氣が付くと、煙草の火なのだ。そして更に氣が付くと、すぐ傍に人間がゐるのである。若い勤人風の男で、人待顔に驛の方を眺めてゐる。瞬間、安太はひどく感動してゐる。死を宣告されたやうな今、すぐ傍に人間のゐることに氣付くことの出來る自分が強く心を打つたのだ。彼は救はれたやうにその若い男へ話しかけたい衝動を感じた。そして彼は上衣のポケットをさぐつてゐる。何ヶ月も前の、煙草を吸つてゐたころの吸ひさしが、くたくたになつて出て來た。

「すみません、火を。」と安太は云つた。

だが、やつと煙草の火を吸ひつけると、彼は忽ちむせてゐる。火を與れた男は、うろんさうに安太を眺めると、驛の方へ去つて行つた。安太は打ちひしがれたやうに、煙草を川の方へ捨てた。だが、これは赤い火の點となつたままなかなか落ちて行かないで空中に長くとどまつてゐる。一體どうしたのだらうと彼は不安になつて息をつめてゐる。しかしそれはふと消える。やはり落ちてゐたのだ。ただ橋の上からはその川面が餘りに深すぎるのだ。

安太は、ほつと吐息をついた。するとその彼に、昔身投げをしたときのことが思ひうかんでゐる。さう、それは十六のときだつた、と彼は考へる。するとそのときの感覺が、ありありと彼の肉體によみがへつてゐる。それは思ひがけない新鮮な感覺である。少年の彼は、息がつまつてもがいた。それでゐながら、彼は、水の中が夜だといふのに晝のやうに異樣に明るいのを見た。しかもその明るさは、やはらかなあたたかい諦めに似た平和を、自分の身體中に沁み渡らせてゐた。全くそれは思つてもみない新鮮な感覺だつた。しかし次の瞬間には氣を失つてゐたのだが。

しかし自分は、どうしてあのとき自殺出來たのだらう。その安太に、幼時からの生活が思ひうかんでゐる。物心ついたとき、彼は、四疊半と三疊の汚ならしい長屋に住んでゐた。最初の五つか六つのころの記憶は、どうしてか波のやうにそり返つてゐる眞黑に汚れ切つたチャブ臺なのである。その脚は、一本とれてゐて、有り合せの板切れでそれを補つてあるのだが、ひどく不安定だつた。彼は、そのために食事のたびに粗相した。そのたびに兄や姉が騷ぎ、母がわめき、父の堅い拳固が彼の頭にとんだ。全く粗相するのは、多い家族のなかで、きまつて自分だけなのが彼には判らなかつた。しかも彼は、食卓に向ふと、

苦痛なほど緊張してゐたにかかはらずやはりとんでもないことが起るのである。彼には、一寸した自分の動きにさへ自分を不幸におとし入れるそのチャブ臺が、意地の悪い鬼婆のやうな氣がしてならなかつたのである。

それからあの死の疊だ。表はぼろぼろになつて臺だけになつてゐる四疊半の隅の疊である。病氣になつた者は、その場所を專有する特權が許されて、そこへ病床が延べられる。すると不思議なやうに死んでしまふのである。彼の兄姉も父もそこで死んだ。少年の彼は、最初次の姉が死んだとき、その疊が死の疊であることをさとつたのである。そして彼は、父や兄などがそこで死んで行くのを見た。しかし彼は、それを口にすることは出來なかつた。狹い家では、そのほかに病床をとるどんな可能な場所があつただらう。しかもそれを口にするといふことは、かへつて家族の者たちに不快を與へるに過ぎないだけではないか。だがそのためにそれを默つてゐなければならないといふことは、やはりひどい苦痛だつた。だから彼にとつては、その疊は、いつの間にか恐怖の的となつてゐた。ふと、その疊の上に寢轉んでゐる自分に氣がついたりすると、思はずあわててとび上つた。そして數日は、その疊から氣味の悪い死が沁み移つた氣がして、自分で自分の身體に脅えつづけてゐなければならなかつたのである。

死はそのころから彼の前に立ちつづけてゐた。そして遂に最後には、自分と母だけになつてしまつたのだが、母は、自分の母でありながら、愛することのできない醜い老婆になつてゐた。そして內職のかもじのきたならしい毛を梳きながら、始終泣きさうな疲れた聲で、もう生きるのは嫌だ、嫌だと呟いてゐた。

そのころ小學校を卒業した安太のつとめた小さな燐寸工場が思ひうかぶ。震動するために燐寸の棒を立てる枠から外れてとび出した金具を、バケツへ拾ひ集めて歩くのが彼の仕事だつた。その鐵の金具は、小さなバケツに半ばもたまると、力弱い彼には、どうしても持ち運ぶことが出來ないのだ。しかし後から後から金具はとぶ。少しづつ運んでゐては間に合はないばかりか、親方がどなり散らすのだ。だからどうしても出來るだけ多く運ばなければならなかつた。そのバケツの重さから、生活の重さを、生きることの重さを、少年の彼は、身にしみて十分すぎるほど知つたのである。その彼は、いつも腰をかがめて歩いてゐなければならないために、少年でありながら老人のやうに腰が曲つてゐた。そしてある日、母はあの疊の上に床を延べて寢て居り、翌朝死んでゐた。彼の十六のときである。その夜、彼は、言問橋の近くの河岸から身を投げた。生活と、死の恐怖から逃れるために。——

安太は、我に返つて呟いた。何を今、くだらないことを思ひ出してゐるのだらう。しかも自分にとつて重要なときに、何故こんなくだらないことしか思ひうかべることしか出來ないのだらう。省線が、轟音を立てて同じ橋の下を通つてゐる。彼はもう暗くて見えない川面から眼をあげ、ぼんやり驛の方を眺めた。人々が構內に渦を卷くやうにあふれてゐる。思はず彼は心に叫んでゐる。全くどうすればいいのだらう。あの醫者の言葉から考へれば、もう自分は永くはないのだ。つまり日頃から自分が心から願つてゐたやうに、この世からおさらば出來るわけなのだ。全く願つたりかなつたりといふわけなのだ。それだのに歩く氣力さへなくなつてゐるなんて滑稽ではないか。自分がこの世からすつかり消えてなくなつてしまふといふことが、今となつてはそれほど恐ろしいことなのか。

氣がつくと、安太は渦卷く人々を羨しさうに眺めてゐるのである。そしてその自分に氣づいた刹那、彼は、云ひやうのない强い戰慄につらぬかれてゐた。しかしその彼は、思ひがけなく神祕な不可解な感情に壓倒されてゐる。その戰慄は、恐怖のそれでありながら、性的なエクスタッシイに似た不思議な歡喜にあふれてゐるのだ。彼はぼんやり考へる。一體自分は何に襲はれてゐるのだらう。そしてこの胸に强く滿ちてゐる歡喜は、一體何なのであらう。彼は耐へがたさうに深い吐息をした。瞬間、彼は再び戰慄してゐる。しかしその胸の歡喜は戰慄のたびに一層力をま

して彼を搖り動かし、それはまた胸のなかの烈しい光のやうに實感される。全く自分は、どうしたのだらう。死ぬより仕方のない今、これではまるで自分は希望にみちあふれてゐる人間のやうではないか。全く自分はどうかしてしまつてゐるのだ。

安太は、何ものかに押しやられてゐる自分を感じながら病人とは思へない勢ひで、驛の方へ歩き出さずには居られなかつた。その彼には、常にないなつかしさで、竹内銀次郎の白い顏が思ひうかんでゐる。そして何故、日頃疎遠な銀次郎の顏が、今自分の胸にうかぶのか、安太には判らないのだ。しかも今の彼に一番痛切に必要なもの、つまり彼の病氣を一擧に快癒させる藥品といふやうな感じで銀次郎に會ひたくなつてゐるのである。彼は、歩きながらも途方に暮れたやうに呟いた。なるほど、銀次郎は醫者だ。しかし醫者に會はうが何をしようがもう無駄なのである。それだのに自分は、どうしても行くのであらうか。それより下宿へ歸つて寢てゐる方が賢明ではないのであらうか。

だが安太は、東中野にやつて來てしまつてゐた。彼は坂道を上つて行つた。日はすつかり暮れて、薄暗い星明りのなかに、取り片づけられもしないで空襲のとき以來捨て置かれてゐる燒跡が、自然に崩壞した廢墟のやうなある野趣のある姿となつてひろがつてゐる。彼は、漸くそのなかにただ一軒ぽつつりと立つてゐるバラックへ辿りついた。板壁のどこかがゆるんでゐるのであらう、低い腰の羽目板の隙間から、一條の光が洩れてゐる。彼は、その銀次郎のバラックの入口にしばらくたたずんでゐた。何のためにここへ來ずに居られなかつたのか、今となつてもやはり彼に判らないのである。

やがて安太は、仕方なささうに入口の板戸の外から二三度聲をかけた。しかしなかはひつそりしてゐて、何の應答もない。彼は、かへつて安心したやうな氣持になつて、ぼんやり四邊を見廻した。遠く新宿の灯が見える。だが、ふと氣が付くと、彼は、危險なほど低く垂れてゐる黑々とした電燈の屋外線を見てゐた。ただ電燈の屋外線が垂れさがつてゐるだけである。しかし彼には、それが何故か不吉な感じがしてならないのである。さうだ。世の中の一切がゆるんでゐる。今に何事かが起るだらう。しかしその何事かは、もう既に自分にやつて來てゐるのではないだらうか。さうだ。先刻病院を出てからだ。

安太は、我に返つて、もう一度聲をかけたが何の應答もない。寢てしまつたのかも知れないと彼は考へる。それならそれでよかつたのだ。彼は歸らうとして、遠くを眺めた。そのとき何ものか得態の知れない力が自分をつかんでゐるのを感ずる。その彼はもう强く入口の戸をたたいてゐる。何故病院を出たとき、どうしてもここへ來なければならない氣がしたか、彼には判らない。しかし自分はどうしてもここへ來なければならない氣のした自分を信ずるより仕方がないのだ。彼は再び强く戸をたたいてゐる。しかしやはり何の應答もない。彼は遂に入口の戸に手をかけた。すると立てつけの惡いその板戸は、思ひがけなく簡單に外れるやうな勢ひでひらいた。そして安太は、銀次郎の起きてゐるのを見た。銀次郎は一間きりしかない六疊の片隅の柱に凭れ、紺色のズボンに茶褐色のジャケツを着た姿で、何かの木ぎれを彫つてゐる。銀次郎は突然夢をさまされた人のやうな、見知らぬ人を見るやうな眼を安太に向けながら、重苦しさうにいふのである。

「お前か。」

安太は仕方なささうに微笑しながら上り口に腰を下ろした。そしてしばらく銀次郎の透きとほるやうに白いととのつた顏を見てゐた。それは全く病的な感じがするほど白い。そして安太は銀次郎が軍醫少尉のとき、色を白くするために亞砒酸を飲んでゐたといふ噂のあつたことを思ひうかべてゐる。しかしそれは單なる噂にしか過ぎなかつたのであらう。銀次郎は再び安太には無關心に、木屑を膝のあたりへ散らしながら、小刀で木を彫りつづけはじめてゐる。その態度には周圍への徹底的な無關心さが感じられる。だが安太は再び人のいい微笑をうかべながら、その銀次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

郎へ聲をかける。
「何を彫つてゐるんです。」
すると銀次郎はふと我慢ならないやうに、彫つてゐた手を膝の上へ落した。そしてしばらくぼんやり、自分は何を彫つてゐるんだらうといふやうに、細長い木片を見てゐる。それから自分を嘲るやうな痙攣的な笑ひ聲を立てながら、ひとり言のやうにいふ。
「煙草のパイプだよ。」
「煙草のパイプ？　だつてあなたは煙草を吸はないでせう。」
「だから、お前に呉れてやるさ。」
そして銀次郎は、勢ひよく安太の傍に投げて寄こした。手にとつて見ると、なるほどパイプである。それは何か髓のある細い木でつくつてあり、その木には出たらめだとしか思へない模様が刻んである。銀次郎は退屈さうな吐息をすると、低い聲でいふ。
「死にてえな。」
安太はその彼へ笑ひかけながら、所在なく家の中を見廻してゐた。さうだ、この家へ來るのは、これでまだ三度目なのだ。それだのに、どうしてこんなに飽々した氣分になるのだらう。そして彼は、家のなかで火を燃すせゐか、ひどく煤けてつららのやうに下つてゐる蜘蛛の巣を見てゐる。それからただ一つの押入れには戸がまだ入らずに古びた灰色のカーテンが吊り下げられてゐて、その裾はぼろになつて垂れ下つてゐるのを見てゐる。それからまたそのカーテンの下から、ざるに入れたしをれた白菜やいろんな空罐がのぞいてゐるのを見てゐる。だがただ、それだけで、そのほかに全く何も見えない部屋のなかは寒々としてゐる。しかし、そのほかに何も見えないといふことが判ると、安太は再び飽々した氣分に襲はれてゐた。彼は再び銀次郎を見た。銀次郎は眉に皺を寄せながら、ぼんやりしてゐる。そこには何か滑稽なものが感じられるのである。安太は、思はず銀次郎へにこにこしながらいふ。
「今日、會社から病院へ廻つて、ここへ來たんです。……何の用事もなかつたんですが。」
「會社？……しかし俺の知つたことぢやないさ。」
「さうです。そりや、全くさうですが……。」そして安太はふと思ひ出していふ。「いいものをお見せしませうか。」
安太は持つてゐた大きなハトロンの封筒を、大事さうに銀次郎の方へ手を伸ばしながら差出した。安太のその眼は異樣な期待に輝いてゐる。それはまるで卒業證書を親に渡す無邪氣な子供の眼に似てゐる。銀次郎は仕方なささうにその封筒から青いレントゲン寫眞を引出した。それは安太の肺のうつつてゐるフヰルムである。銀次郎はほの暗い電燈へしばらく大儀さうに透かしてゐる。氣が付くとフヰルムの青い色が銀次郎の顏に落ち、忽ちその白い顏はいやらしい死人の顏に變つてゐるのだ。やつと銀次郎は、フヰルムを封筒へ入れて安太へ投げ返すと、物憂さうにいふ。
「お前は知つてゐるのだらう。」
「ええ。大體は病院の醫者の言葉で想像がついてゐるんですが。半年持てばいい方ですか。」
すると銀次郎は、ふいに思ひがけない激しさで斷定する。
「半年？　三月ぐらゐだらう。そしたら死ぬんだ。それが正確な客觀的結論だ。この結論は誰だつて超えることは出來ないよ。」
瞬間安太の身體のなかをあの恐怖とも歡喜ともつかない戰慄が、火のやうに通り拔ける。その彼は感動したやうに微笑してゐる。しかし銀次郎は、その安太へ、無關心な冷淡さで呟いた。
「しかし俺の知つたことぢやないさ。」
さう。全く銀次郎の知つたことぢやない、と安太は考へる。しかし安太はその銀次郎へやさしい微笑を投げかけながら慰めるやうにいつてゐる。
「よかつた。ほんとによかつたと思ふんです。あなたの口からそれを聞けたといふことは。」
「俺の口から？　誰の口から聞いても同じことさ。」
「勿論、それはさうなんですが、しかし、——まあただそれだけのことなんですよ。それぢや、來られたらまた來るつもりです。全く

また來られたらですが。」

さて、自分はどうするつもりなんだらうと安太は、銀次郎の家の灯の見えない道傍の燒け崩れた石塀のかげを見つけると、救はれたやうに立ちどまつて呟いた。三月、すると來年の二月だ。つまり後もう三度給料をもらへば、それで自分はこの世に居ないのだ。すると、再び彼の身體のなかを强い戰慄が通りすぎてゐる。彼は、呆然と石の上へ腰を下ろしながら、やはり歡喜にあふれてゐる自分が不可解なのである。全くどうして、醉ふやうな强い歡喜が自分を打ちひらくのであらう。こんなことは今迄にないことだ。そして一瞬、安太は、この歡喜のなかに何かの啓示のやうなものを感じてゐる。その彼は、自分がまるでふいに鼓をむしりとられた蛙のやうな感じがしてゐる。何か自由で、何かその自由が肌寒い。

全く判らない、と安太は繰り返す。こんな晴れがましい氣分なんて自分には不似合だ。むしろ、自分のすべきことは、自分の死をわめき、呪ひ、自分の死の不當を人々へ訴へることではないであらうか。それともただまつて今晩自殺するかだ。しかし今、自分の前に誰かが通りかかつたら、その人へ救ひを求めるであらうか。いや、自分は逆に嬉しさうに、自分は三月後に死ぬのだといふことを告げるに違ひない。

安太はあたりを見廻した。だが、あたりはひつそりしてゐて、先刻から人の氣配もない。安太は、再び自分の思ひにおち入つてゐる。しかし自分は、一切が不可能になつた今、本當に生きて行けるであらうか。生きて行けるとしても、如何にして生きて行くのか。恐らく神を信じてゐる人は、神によつてそれは可能であらう。しかし自分には神はない。自分の死を超える可能を信じ得ない者にとつて、もう自分は全くの無意味なのではないか。あの醫者が云つたやうに、せいぜいうまいものを喰つて靜かに寢てゐるべきなのではないか。勿論、醫者はその言葉で患者の死を暗示して呉れたのであつても、それが醫學の最善の勸告なのであらうか。しかし全く、一切が不可能となつた今、自分はどうして生きて行けばいいのであらう。何が自分に可能なのであらう。首をくくるより外には、何の可能も殘されてはゐないのではなからうか。

安太は、ふと白川といふ方面委員の廣い庭を、そしてそこでの生活を思ひうかべてゐる。それは身投げした彼が、通行人に救はれ、警察からその方面委員の手にひきとられて五日間下男小屋でその家の下男と一緒に暮したのである。その家の生活は、安太には不思議なもののやうに思へた。本所の眞中にこんな立派な家があるといふことが更に不思議だつた。築山があり、泉水があつた。そしてその手入れのよく行き屆いた芝生では、きれいな洋服を着た十二三と十歳位の二人の少女が、犬と戯れてゐた。洋室の窓には、やはらかさうなレースのカーテンが風に搖れ、夜は何かの宴會があるらしく、レコードの音樂にまじつて人々の賑やかな笑ひ聲が聞えてゐた。そこには死の影すらなく、生活は輕やかに樂しく流れてゐた。生活、こんな生活が人間に可能であるとは、現在眼で見ながら信じられなかつたほどである。

だが、終りに近いある日、安太は下男の指圖を受けて植木に水をやつた。そしてそれを了へてほつと一息してゐるとき、傍の窓から聽いた、高い調子でゆるやかな旋律をもつたピアノが彼の耳を打つたのだ。それは彼をひどく動かした。それは學校にもなかつたピアノなのである。そしてそのピアノの音が、こんな彼の身近に起つたことが、彼を驚かせたばかりでなく、あの上の方の少女がひとりで彈いてゐることに驚いたのだ。そしてまた、そのピアノの音がその生活の象徵のやうに流れて來て彼を打つたのだ。だが、すぐ翌日、彼は、その當時今つとめてゐる郊外電車の大株主であつたその方面委員の手から、内田といふ運轉課長の手に渡された。そして次の日から、その郊外電車の小さな驛の驛手見習として毎日その家から通つた。しかしその家の生活は、子供もなく、大きな家に住みながら、ときに菜を買ふ金もないときがあつた。地代はとどこほり、自分のものであるその家も擔保に入つてゐた。そして深夜、五十近いその

男は、醉ひどれて歸つて來たと思ふと、いきなりその妻をなぐりつけるのだつた。勿論、家に歸らない日が多かつた。妾を三人かこつて居り、そこを廻り歩いて泊るのだ。しかし會社では部下にも上司にも評判のいい男で、給仕にも冗談を云つて笑はせるのだつた。しかし安太は彼のかげの生活を知つてゐた。商人が來て密談してゐることも多く、その家も會社の資材で建てたといふ噂さへあつた。しかし安太に對しては、夜中、たたき起して、酒くさい息を吐きながら、理由もなく大きな聲で罵倒するのだつた。「おい、死に損ひ。一體誰のおかげで生きてゐると思ふ。俺を誰だか知つてゐるか。俺が居なかつたらT電は動かないんだぞ。」それが明け方まで繰り返しつづけられるのである。その彼に云はれる言葉は、そつくりそのまま、妻にも繰り返されるのだつた。そのやうなとき、彼は、彼が引取られるまで物置同樣になつてゐた女中部屋の薄い蒲團の中で、深夜から夜明けまで、罵聲や物のこはれる音や、妻の悲鳴をじつとこごえた心で聞いてゐた。その妻は、いつも泣きはらした眼で、臺所の隅でいつもぼんやりしてゐた。ずつと後に二階への階段から突落されたのが原因で、死んで行つたのだが。さうだ。その葬儀には、妻の親戚は一人も見えなかつた。彼女には親も親戚もなかつたのだ。彼女は、その課長の大學生當時の下宿先の女中であつたことを、そのとき知つた。それでありながら彼女は、安太へ口を利いたこともなく、食事の世話もして呉れたことはなかつた。ただいつも暗い顏をして、默り込んでゐた。彼女の死後、妾の一人がその後に直つた。それは、その會社の事務員をしてゐた女であつたが、そのときもう安太は出征してゐたのである。

死に損ひ。それは夜更け安太に對して怒鳴り散らされる罵聲から附近に知れ渡つてゐた。それとともに、自分の給料は、會計から直接運轉課長に支拂はれ、死に損ひは自由になる一錢の金も持つてゐないことも知れ渡つてゐた。しかしその家の塀にほとんど喰つつくやうに立つてゐる裏の長屋の人々は、安太を何かと慰めて呉れた。そのなかに山本といふアナーキストが住んでゐた。畫家の彼はときにやつて來る警官の前でも平氣で春畫を描きつづけてゐるといふ男だつた。彼は春畫を描いて生活を立ててゐたのだ。世の中は、次第にファッショに傾き、山本のやうな思想をもつ者への彈壓は苛酷を極めてゐたが、その山本といふ男だけは、何か特權でも持つてゐるやうに自由であつた。彼の左翼關係の藏書も何の制限も受けてはゐなかつた。その彼が、ある日、十六の安太に一册の本を貸して呉れたのである。それ以來次々と彼は安太に本を讀ませた。しかしその本は、十六の安太には何とむづかしい本であつただらう。その本でやつと覺えたものはフーリエやバクーニンやクロポトキンなどの名前にしか過ぎなかつた。だが、そのなかで安太を今に至る迄支配しつづけてゐる自由と云ふ言葉を覺えた。それはあのピアノの音と不思議に偕和するただ一つの言葉だつたからだ。最初の自由への衝動は、運轉課長への反抗であつた。それは彼自身の意味では、現在の社會組織への反抗を意味してゐた。その家をとび出して、知り合つた車庫の工務員の家に間借りをした。さう。十八のときだ。忽ち、以前の方面委員に呼びつけられ、恩知らずをののしられた。それは腹が苦しさうにふくれてゐる、太つた、顏の丸い四十過ぎの男だつた。自由が欲しいんです、と安太は云つた。自由？と不審げな顏をしたその方面委員は贅澤な肘掛椅子のなかで何を生意氣いふかといふ風に急に笑ひ出した。そして笑ひに咽喉をつまらせながら、それはデパートで賣つてゐるのかい？と云つた。安太はだまつてゐた。すると彼は怒つたやうに云つた。金をいくらでも出してやるから、それを今から行つて買つて來て見せろ。それからでないと、今迄世話になつてゐる家から出ることは許さない。

さうだ。安太はその方面委員の家を出ると、その足でデパートへ行き、長い間休憩室に腰を下ろしてゐた。そしてただ人々の動きをぼんやり眺めてゐた。それから安太は、再び運轉課長の家へ戻つて行つたのだつた。そして寢ても起きても會社支給の制服一着とい

ふ姿で、車掌となり、工務員となつた。車掌から工務員となつたのは、職場でさへ運轉課長の支配下にゐることが耐へられなかつたからだ。その安太は裏のアナーキストから本を借りて來て、暇さへあれば讀みふけつた。自由！　自由！　それを求めて安太は叫んでゐた。その安太のなかには、常にあのピアノの音が流れてゐた。そしていつの間にかそのピアノの音とともに一つの幻想がうかんで來るのだつた。それは死や生活の重さのない自由の國の人々の顏であつた。それは貧しい服裝ながらも幸福にかがやき、にこやかに自分へ聲をかけるのだつた。

「今日は。いいお天氣ですね。」すると自分も同じ言葉を微笑しながら答へずには居られないのだ。「今日は。ほんとにいいお天氣ですね。」

ただ、それだけの幻想。全くただそれだけの幻想。しかし彼等の聲は、うたふやうなひびきをもつてゐた。それはあの、明るいピアノの旋律と何とよく偕和したであらう。そして安太はその幻想の實現の手段を求めて、むさぼるやうに本を讀んだ。無政府主義から共產主義を知つた。しかしそれらの思想に共鳴を感じるやうになつてから、妙なことに夜になると、死の恐怖に襲はれ、寢床の上にとび上るのだつた。安太は、何故自分がある思想をもちはじめるや否や、死の恐怖に襲はれるやうになつたのか自分に理解出來なかつた。きつと身體が弱つてゐたのだらう。その彼に、人間が死から自由になるときにはじめて、それらの革命が有力な意味をもちはじめるのではないかといふ疑惑にとざされ勝だつた。さうなのだ。人間が死から自由になつたとき、革命が、眞實のそして唯一の革命となるだらうといふ氣がしたのである。生活を重くするだけにしか過ぎない現在の一切の社會制度は今すぐにどうしても破壞されなければならぬ。しかし人間の物的なものからの解放が、同時に死からの解放でないかぎりは、その革命は、徒らな悲劇となるに違ひないといふ氣がしたのである。だが、死からいかにして人間は自由になり得るのであらうか。若しそれが不可能だとすれば、社會革命は、人間にとつて遂に無意味なものとなるのではなからうか。

そのころだ。あの安太の胸に痛切なピアノのひびきがふとやんでしまつたのは。安太はたまらなくなつて、裏のアナーキストに訴へた。するとあの坊主刈のアナーキストは、安太の耐へられない苦しみを笑つた。われわれのユートピアが實現したとき、死なんかどうでもよくなるのだ。そのときわれわれの意識がすつかり變つてしまふのだからと云ふのだつた。だがユートピアが實現してもやはり人間は死ぬんでせうと安太は云つた。すると彼は再び笑つたのだつた。その日から安太は、彼から本を借りることをやめてしまつた。そしてある公休日の日、再びデパートへ行つて休憩室に坐つてゐた。その休憩室の前のラジオ部からは、たえまなく軍歌が流れ、出征して行く若い人々の姿も見えた。あのとき、何故彼は再びデパートへ行つたのか判らない。そして眼の前に流れる、どことなく落着きを失つた人々をぼんやり眺めながら、何を考へてゐたのだらう。さうなのだ。ただ、あのピアノの音と幻想をとり戻したかつたのだ。しかしそれは無駄であつた。たそがれ近くなつてデパートを出た。その入口の近くに、幼い子供を連れ、赤ん坊を負つた貧しさうな女が千人針をもつてたたずんでゐた。晩秋の風が强かつた。赤ん坊は泣き叫び、幼い男の子は、乞食のやうな恰好で鋪道の上にしやがみ込んでゐた。その男の子の死んだやうな顏には、寒さうな水ばなが垂れてゐた。安太はそれをしばらく眺めてゐた。それから電車に乘つて、陸軍省へ入つて行つたのだつた。

今度の戰爭がはじまる二月前のことだ。二十の志願兵として麻布に入隊した。永い滿洲の駐屯生活。北支への移動。その間安太は絕えず死を考へてゐた。精勤だつたためか、いつの間にか下士官になつてゐた。しかし何か一切が無意味だつた。その一切は無意味だといふ感じは、何をしてゐても彼からついて離れなかつた。しかもその彼は、少年のときの彼とは違つて、自殺出來ないのだつた。ただ絕えず死と見つめ合つてゐるだけだつた。そ

れだのに何故決死隊へ志願したのだらうか。中隊から三名の決死隊員が募られた。漢口作戰のときだ。そのとき安太は、自分でも理解出來ないことだつたが、すすんで決死隊を志願したのだつた。だが足を負傷しただけで上海へ後送された。肺患が併發した。内地へ送還。東京での長い病院生活。その病院に銀次郎がゐたのだつた。さう。敗戰の年の三月だつた。學校を卒業したばかりの若い軍醫の銀次郎は、放蕩の限りを盡くしてゐた。毎日、いろんな女が、銀次郎へ面會にやつて來るので病院でも評判だつた。しかし彼の亂行は、彼の美貌の故にかへつて上官から默認されてゐるやうな形だつた。その銀次郎と知り合つたのは、些細のことからだつた。やつと歩けるやうになつた安太が、自分の故郷である本所の燒跡を見るため、外出の許可を貰ひに醫務官室へ入つて行つたときだつた。その部屋には銀次郎がただひとりゐて、退屈したやうに、自分の硯箱の上にナイフで名前を刻んでゐた。彼は安太から用向きを聞くと、冷淡な嘲るやうな聲で云つた。「お前は死ぬつもりかね。……左肺に大きな空洞があるんだぞ。」その瞬間、安太と彼との眼が合つたのだ。その一瞬に、銀次郎が自分と同じ哀れな存在であることを理解したのである。だが、銀次郎は何思つたか、再び嘲けるやうな、しかしどこか復讐するやうな特徴的な笑ひ聲を立てながら、にべもなく「駄目だ。」と云ふとそのままふと立ち上つて部屋を出て行つたのだ。

その後、回診のときになど銀次郎は、意味ありげな笑ひをうかべながら「どうだね。」といふのだつた。その「どうだね。」といふ言葉には、あるいやな耐へがたいひびきがあつた。そのたびに安太は「變りありません。」と答へた。すると彼は歪んだ笑ひを見せながらいふのだ。「當り前さ。お前が變るときは棺桶へ入るときさ。」しかし、それでゐながら、安太と彼との間には、ある暗默の了解のやうなものがあつた。そして終戰の日、いろんなデマがとび亂れて、病院のなかも騒然としてゐるとき、思ひがけなく彼がひつそりやつて來て、窓のところでぼんやりしてゐる安太の肩をたたくのだつた。振り向くと彼は何か眞劍な眼をしながら、しかしやはりあのいやなひびきのある調子で、「どうだね。」と云つたのだつた。安太は、その彼へ思はず笑ひかけながら、いつもと同じやうに「變りありません。」と答へた。そのとき銀次郎はどんなに氣狂ひじみた笑ひ聲を立てたであらう。そして思ひがけなく安太の手をぎゆつと握りしめたのである。それは夏だといふのに冷たい女のやうな手だつた。しかも不思議なことには、その彼は、眼に涙をうかべながら、ある親しみのあふれた夢中な聲で云つてゐるのだつた。「敗けたら死ねると思つたが、死ねさうもないね。一體どんなことが起つたら、自分らは死ねるのだらう。」

その後間もなく、銀次郎は病院を去つたのだが、しかし安太は、その後まだ一年餘りも病院に殘つてゐた。風のたよりに、銀次郎は就職もせずに燒跡のバラックに住んでゐるといふことを聞いてゐた。彼の家も罹災したのだ。無理に退院してから、はじめてその銀次郎のバラックに訪れた。半年ほど前だ。二度目は彼の母の葬儀があつた翌日だつた。その時一日中銀次郎の家に居た。そして三月後には、砂川安太といふ人間は、この世の中にゐなくなつてゐる。――

安太の背に再びあの戰慄が過ぎる。どうしてこの戰慄が歡喜のそれでもあるのか、彼にはやはり理解しがたい。そして彼はふいに放心しながらその戰慄にもかかはらず、心の奥底に遠く鳴りひびくピアノの音を感じてゐる。しかし、そのピアノの音は、あの古典的なゆるやかな調子のものではなく、ひどく急調子のものとなつてゐる。それは、彼を震撼し、何ものかへはげしく驅り立てるのだ。彼は不安さうに落着なく立ち上る。一體自分は、何を仕出かさうとしてゐるのだらう！何をしようと、一切が不可能となつたこのときにだ。彼はあたりを見渡した。やはりひつそりして、星明りに燒跡が、黑々とひろがつてゐる。さうだ。自分には何事かが起つてゐるのだ。その時突然ある一條の光が彼の胸にひらめいた。彼は、しばらく放心したやうに

佇んでゐた。その彼は、思はず微笑してゐる。そしてそこから下り坂になつてゐる道を、勢よく降りて行つた。……

坂の途中で、突然恐怖にみちた女の低い短い叫び聲がした。安太は思はず立ち止つて、ぼんやり我に返つた。その叫び聲は、その坂にそつて立つてゐる半ばこはれた石崖のかげの闇の中から聞えて來たやうに思はれた。彼はその闇のなかを見つめた。すると思ひがけなくそこに事務員風の女が立ちすくんでゐるのである。やつとその女の顏が見えて來る。ほの白く闇に浮んでゐる顏に眼のあたりが深深とした黑いかげになつてゐる。さうだ。女は、もう夜も遲いこの淋しい道でふいに出くはした自分を怪しい者だと思つてゐるのかも知れない。それにこの復員服姿は、社會のつくり上げてゐる恐怖の幻影にぴつたりするではないか。安太は凍えたやうに立ちつくしてゐる女を避けるやうにして歩み出してゐる。すると思ひがけなく女は、再び嗄れた强い叫びをあげると、その場にしやがみ込んでしまつたのである。見ると、顏に手さへぴつたり當ててゐる。そのときもう彼は何が彼女を驚かせたのかを理解してゐる。義足のみじめなほど情けない音が、かへつてこの靜かな夜には不氣味に聞えるのだ。彼は當惑したやうにしばらく動けなくなつてゐる。勿論自分はこの音には馴れてしまつてゐる。しかし世間も、すつかり自分のやうな者の足音には馴れてしまつてゐると考へてゐたのは、誤りであつたのだ。

しかしやがて安太は、自分の足音に耐へながら歩き出した。そしてその女の傍をすり抜けるとき、ふと彼女の驚きを慰めたい氣がして、そのしやがみ込んでゐる女をちらりと眺めた。しかしただそれだけである。彼は聲もかけないでだまつたまま通りすぎた。だが二三歩も歩み出さないうちに、ふとその女が銀次郎の妹の登美子であるやうな氣がしたのである。彼は振り向いた。近くに銀次郎の家の灯が見え、その女はもう立ち上つてその方への道を駈け出さうとしてゐる。

「登美子さん……おやないですか。」

安太は、思はず咄嗟の聲を出してゐる。女はますます度を失つたやうな樣子で、立ち止ると、うろうろ振り返つた。彼はその女へ更に聲をかけた。

「まだ一度しかお目にかかりませんけど、……病院で、兄さんのお世話になつた砂川ですが。」

女の態度は、ふいに崩れた。それから餘り驚いた自分が滑稽に感じられたのか、しかしまだ恐怖の餘韻の感じられるうつろな聲で笑ひはじめてゐる。それはとめどなくいつまでも續いてゐる。彼は微笑しながら彼女を見てゐた。

「やはり登美子さんでしたね。」

その安太へやつと登美子は笑ひをとめて答へる。

「ぼんやり考へ事をしてゐたので、びつくりしましたわ。」

「さう。よく判りますよ……今、會社からのお歸りですか。」

登美子は急に安太を見つめながら、無表情になつて首を振つた。

「ああ、用足しのお歸りですね。」

すると登美子は、再びだまつたまま同じやうにゆつくり首を振る。

「でも、これからお家へお歸りになる途中なんでせう。」

だが、登美子は、ただだまつて首を振るばかりなのだつた。彼は仕方なささうに微笑しながら、登美子がその方へ駈け出さうとしてゐた銀次郎の家の灯を眺めた。すると登美子も彼と同じやうに、自分の家の灯を眺めてゐる。彼は、その彼女をしばらく見てゐる。しかし彼女は、その彼に氣づかないで、ただ自分の家の灯を眺めつづけてゐるのである。ふと安太に何かが判つた氣がした。

「そのへんで、お茶でもお飲みになりませんか。」

すると登美子は我に返つた、救はれたやうな聲でいふ。

「わたし、おいしいコーヒーのあるところ知つてゐますから、御馳走いたしますわ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com